

「応用哲学・分析アジア哲学プログラム 参加報告書」

京都大学文学研究科 博士2年 (氏名) 飯塚 一

①学習成果

政治大学・陽明大学・清華大学の先生・学生たちとの交流を経て、哲学の様々な分野にかんしてお互いに意見を交換した。とくに政治大学でのワークショップでは、現代哲学の視点から東洋哲学を再構成する発表が多く、本派遣のテーマである「分析アジア哲学」の構想にかんして、新たな知見を得る結果となった。またワークショップだけではなく、ディナーなどを介して、派遣先大学の教員・学生たちと交流を深めた。そのなかで、日本の学生と台湾の学生とで、学問に対する考え方の差異（国内に留まっていたよいかどうかなど）について話し合う機会があり、有意義な交流をすることができた。

②海外での経験

現地の学生たちに茶畑や夜市に案内して頂いた。茶畑は台中の山奥にあり、日本とは異なる植生が興味深かった。また夜市には主に日本授業を受講している学生たちに案内して頂いた。その際、日本と台湾の文化的差異について考える良い機会となった。とりわけ日本文化について尋ねられる機会が多く、自国の事柄について、深く考えさせられた。

③プログラム内容

各大学において、以下のプログラムを遂行した。

- 7日：政治大学にて、NCCU-Kyoto-YaleNus Workshop への参加（飯塚発表有）
- 8日：政治大学にて、NCCU-Kyoto-YaleNus Workshop への参加
- 11日：陽明大学にて、Yang-Ming Kyoto Workshop on Language, Mind and Action への参加
- 13日：清華大学にて、NTHU-KYOTO workshop on philosophy for Young Scholars への参加
- 14日：清華大学にて、日本語授業への参加（飯塚発表有）。および、高校生に対する哲学の授業。
- 17日：清華大学にて、日本語授業への参加。および、高校生に対する哲学の授業。
- 18日：清華大学にて、若手哲学研究者達との意見交流会。および、日本語授業への参加。

④進路への影響について。

台湾の学生たちは、普段から様々な手段で積極的に英語に親しんでおり、また日本語学級の学生たちも、日本人とコミュニケーションする機会を無駄にしまいとする態度が見られ、非常に刺激的であった。その結果、積極的に会話していく姿勢が、英語能力のみならず、英語での「コミュニケーション」に不可欠であると、認識させられた。

またとくに、たんに語学力だけではなく、異文化の理解が、自分には十分ではないと感じた。国際理解を深めるためにも、いまからでも、日本在住の外国人との会話や、Skype などをつうじて、コミュニケーションを日常的なものにしていくことが重要だと考える。

以上を踏まえ、英語力および様々な国の人々とのコミュニケーションの重要性について改めて認識させられ、留学の必要性を感じるとともに、その意欲が非常に高まった。来年度にでも留学をすることで、たんに日本国内だけに留まらない研究をしたい。